

妖怪論



蛇原岳鳴

鬼打鬼一新妖怪論

古来から、妖怪、憑き物、デーモン、悪魔などと言われているものがある。それは、実体のあるものから、ある特殊な条件で経験した「現象」を、妖怪として喩えたものまで様々だ。本書では、作者じしんの経験から鑑みて、妖怪とはこの手の経験を言ったものだ、と言えることが多々あったので、本書を用いてそれらのことを記していこうと思う。

鬼子母神

第一走者は・「鬼」の名前を冠するものから紹介していこうと思う。現在でも日本全国で崇拝されている・「鬼子母神」からである。

古来から、子供の誘拐、かどわかしをする、妖怪、デーモンの類いがある。インド・中国・日本における「鬼子母神」、ユダヤ伝承、中東、バビロニア神話における「リリス」などがそれである。それは子を大量に産むものであり、宿主の内部に潜り込み自己(子)を量産し続けるものである。本書においては「子」の定義とは自己の複製である、とする。

自己の複製をほとんど無限に生産するもの・ふと、思いつくのはウイルスではなからうか？無限に人に害をなす子を孕むものを、古人は鬼子母神、もしくはリリスと呼んだ。両者に共通するのは、人に害をなす鬼、または悪魔の「大なる母」と呼ばれていることである。鬼子母神とリリスに共通する点は他の者(たいていは人間)の子を攫う、誘拐する、もしくは喰らうという伝承のあることである。これは、ひじょうに示唆的な伝承であり、宿主に潜り込み、その端末の細胞、つまりは子供を誘拐する、もしくは喰らうことを意味している。多くの伝承はそれらの存在を指し示している。その無数の鬼たちの母なる存在は、宿主の子を誘拐し「言うことをきかせる」ということにより、宿主そのものを「言うことをきかせる」のである。

古来、鬼子母神やリリスなどの、他人の子をさらって食う「デーモン」の伝説はここから生まれた。食われた他人の子はどうか？もちろん、さらったものの子供となるのだ。鬼子母神やリリスが子だくさんの安産の神であるというのも、これら「ターゲットにしている他人の一部」、「子」を取り込み、自分に組み換えてしまうことによる。自分に組み換えたそれらは、こんどは鬼子母神の一部・「子」となるのだ。

これらウイルスと免疫系との戦いにも見えるこの攻防は、エジプトの古い神話にも見られる。神話は、これら「人ならざる存在」の戦いについて、言及している。女神インスがラーの涎であるところの「ターゲットにしている他人の一部」を蛇に変え、セトという鉄壁のファイアウォールをくぐり抜け、ラーから「秘密の名前」を盗み出したというあの伝説に、如実に現れているのである。盗みだした「秘密の名前」つまり、その「コード」は、インスの息子であるところのホルスに与えられ、彼の力の源となったという。

これら「人ならざる存在」が何を示しているのかと言えば、そのようなもの、としか言えない。しかし、それらの力を受け継いだ者も、「人の中に」存在している。彼らは古来、「呪術師」「魔術師」「長袖者」などと言われた。なぜ、長袖者と呼ばれるかと言えば、「印形」を結ぶとき、それを人に見られないようにである。そこから「長袖」「長袖の者」と言われるようになったのだ。

家にあがりこむのには、ターゲットになるものの体の一部「爪」「髪の毛」が用いられ、それを人形や瓶、粘土などに閉じ込めて、ラポールを築いていく。術者はその霊体を元に構築したそれら分身と主従関係または友情関係を築く、そうすれば実際に生きているターゲットも言うことをきくようになるのである！マスタークラスになれば相手の「爪」や「髪の毛」がなかったとしても、それを行うことができる。筆者はやられたことがあるのでよくわかるのだが、東北出身のその呪術師(女性)は霊体を数珠または石に閉じ込めるということを行っていた。拉致された「霊」(私)や知覚した他の霊の記憶に基づく記憶を再現すると、まず、自分の近い周りのもの、伴侶、家族、仲間と切り離されたという感覚がまず生ずる。私と一緒に閉じ込められたものは、「みんなどこに行ったの?」「女房はどこだ?」などの言葉を繰り返していた。普段、我々は近しいものたちの霊的なネットワークが形成されているため、そこから無理やり切り離されたという感覚がまずあるわけである。そして、見えるのは一面、白い光である。UFOによるアブダクション体験に近いものがある。よく、UFO誘拐被害者が、逆行催眠を受けたときに現れる「白い光」と共通するものがある。攫ったのは「宇宙人」ともとれるが、ここでは「呪術師」による誘拐ということで話しを進める。

見えるのは一面の「白い光」、そして塩の味と匂いがする。そして、奇妙なことに見かける人見かける人「同じ顔」なのである。それは、その術者の顔であった、我々はその術者の内的世界に閉じ込められたのだ。そして、内的世界に閉じ込められた霊の欠片が何をするかと言えば、その術師の霊質を用いて己の「部屋」「家」を構築するのである。一見自分の部屋に見えるようだが、それはその術者の霊質に「記憶」が反映して「そう見えている」だけに他ならない。塩の匂いや、味のするのは、術者が「盛り塩」などをしていからだろう。そして、私は繰り返し「おまえはわたしのもの」という暗示をかけられた。より、悪質な術師だったら、さらに霊体に「烙印」を押す、ということがされる。それに従わなかったのは、ひとえにその女術師の顔が「醜かったから」であった。そうして、観察した彼女の霊的內部世界は奇妙なものであった、奇妙なフィールドのようなものがあり、彼女は「眠り姫」「白雪姫」のごときものであり、手下の霊体(式神)は、彼女を守る「小人」のごとく、お姫さま扱いしているのである。心の内部には自己愛に満ちた妙な物語世界があり、彼女はそれが「おかしい」と、思いもしない。そして変質した拉致被害霊体たちも、だんだん「おかしい」と思わなくなるのである。妙な「姫ワールド」に取り込まれ、マグロのように「姫」のまわりを回遊しているのだ。

これら霊体の「誘拐」を為すものの動機を言語化するならば、「所有したい」「支配したい」・である。そしてその裏には、「増殖したい」という基本欲求が見え隠れする。これは何を意味するか？この東北出身の術者の家では、鬼子母神を熱心に崇めており、鬼子母神がご本尊だった。私が見た術者の顔が醜かったのも、「鬼子母神」だからであろう。「鬼」は古来、醜く、人を驚かし、嫌悪させるような顔をしている。醜い顔、そして常人には無い特殊な能力備わっているのだ。それが、鬼である。そして、鬼子母神は他人の子(一部)を誘拐して食らい、自分のものとしていた。

それに対する、我々の防御策にはどのようなものがあるだろうか？西洋では神がリリスを罰するために遣わした三人の天使の名前を刻んだ護符が用いられる。東洋においては、釈迦牟尼が鬼子母神を諭すために子の鬼を、逆にかどわかす。仏教というのはつねに「鏡」のように、食い返すところがある。それは、かどわかし、所有権を本人のものから、誘拐者たる鬼子母神のものにするのならば、それはもう「だれのものでもない」あの領域と抵触しているのである。したがって、「鬼子母神のもの」としたところで、それはもう「誰のものでもない」あの領域、誰のものでもあり、誰のものでもない、不確定性、禅籍でいう「山が山ではなく、川が川ではない」あの領域に抵触している。それが故に、鬼子母神の子も、仏陀に誘拐されるのだ。諸々のものが、自分のものであるというその心こそは、ママカーラ、我所執である。無我、無自性というのならば、誰が「自分のもの」と主張しているのだろうか？

両面宿儺

人に言っていることのその大抵は自分にもあてはまる。とりわけ、心的次元の奥深くにある、最もベーシックな言語形態は「自己表明」である。

例えば・・ある人が筆者に、あなたは稼ぎがないんだから実家に帰りなさい、と繰り返し勧めていた。作者は安アパートに独り住まいをしている。実家に帰ったほうが確かに、経済的には効率がよい。しかし、他人に勧められて動くのも嫌だし、なんというか、それがあまりにも執拗なのである。その人はキリスト教の信者であり、しかしながらキリスト教から離れて、魔術的なものか言いようのない自らの教体系を創始している人であった。彼の名前を仮にXさん、としておこう。

あるとき、気づいた。「彼」は自分自身に言っていないか？ここでいう「家」とはベテル・・「教会」のことではないか？と。「神」は自らに語りかけるが、多くの人には気づかない・・つまり、神、ないしは真の自己からすると、Xさんにおいては 神→X といった構図になる。が、Xさんは「真の自分」の声に気づかない・・するとどうなるか？Xさんは自らの隣人に説教をかますのである。神→X→隣人 の構造が成り立つ。

もう一人、前述の例の東北出身の呪術師に関することだ。この時の筆者は、神が味方してくれたのか、その勢いで彼女の「呪術圏」（スペルバウンド）から離れつつあった。すべてが彼女の顔になる・・映画「マルコピッチの穴」の如き、その世界にあって、私は彼女に「あなたの力は、図抜けたものがある。しかし、どうもあなたが好きになれそうにない。」と言ったところ、彼女が全く同じ言葉を、共通の知り合いである、他の人に言っていたという情報が入った。グレーのスーツをピシッと着こなしたその人は、彼女がどうしてそんなことを僕に言ったのかわからない、と言っていた。問題は、彼女が「神から自分に言われたことをなぜ、そのまま自分が思いついたことと認識して、他人に伝えているか？」という点である。もっとも、「自分に言われたことを、そのまま他人に伝えているという点」では筆者も同じであるが。ここでも、神→本人→隣人 の構造が成り立つ。この場合「神の言葉」は筆者から発せられたということになるが、逆に 神→筆者 という構造も成り立つのだ。つまり、筆者は「力は図抜けているものの、（神が）好きになれそうにない」人ということになる。

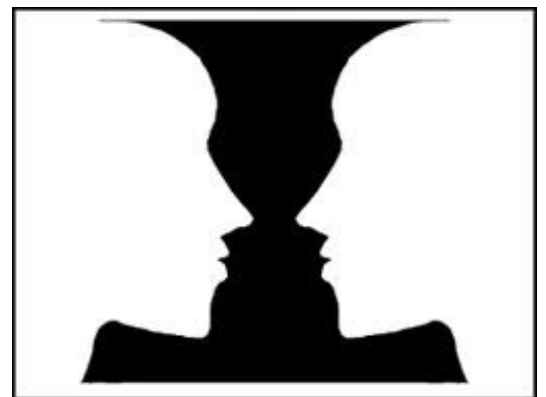
この現象における共通点とは、内から声をそのままダウンロードしてしまい、ダウンロードしたことに気づかずに他人に言ってしまう、伝導しすぎの電線のようなことになっている点である。つまるところ、「それ」に対する自己を定めていないのだ。

これらの経験をふまえて、私が瞑想において見たビジョンは、古代ローマの双頭の神「ヤヌス」の如きビジョンであった・・。古来、それは日本において両面宿儺とも言われた双頭の神である。



はじめにおいて、顔がそむき合っている状態である。神ヤヌスのように、頭の2つあるもの・・そういう切り絵である。

こんどは、その紙を丸めてほしい。見事にface to faceの状態が完成する。我々はふだん、このように会話しているのである。これが「双頭神」の真意であり、禅籍において「表口は狭いが、裏口は馬車も通り抜け」の真意である。だれしも切り絵の真ん中、黒い花瓶の中の信じがたい広さには気づかない。もっとも、黒い花瓶は『ヤヌスの頭』のちょうど中心にあるのだが・・。



陳列された商品に聞けば、商品自らが自己表明するコンビニを思い浮かべるとよいだろう。心の世界で相手に言っていることは、より深い次元で見れば、自分自身に当てはまる。なぜならば、心的世界においては、向き合っている、FACE TO FACEということはありえず、すべてあの存在の中心から、内から外に語られるものだからだ。すべての瞑想者は意識の深淵において、自己

から他者に語る言語形態の崩壊、言語が自己表明にしかなりえないあの次元に到達するだろう。

ぬらりひょん

かつて、主イエス・キリストはこのようにことを言った。
「汚れた霊は、人から出て行くと、砂漠をうろつき、休む場所を探すが、見つからない。それで、『出てきたわが家に戻ろう』と言う。戻ってみると、空き家になっており、掃除して、整えられていた。そこで、出掛けて行き、自分よりも悪いほかの七つの霊と一緒に連れて来て、中に入り込んで、住み着く。そうすると、その人の後の状態は前よりも悪くなる。」マタイ12:43~45

同じような民話も日本には伝わっている。「ぬらりひょん」という妖怪である。妖怪の総大将とも噂されるこの謎の妖怪は、他人の家にあがりこみ、あたかも自分が主人のようにふるまう、とされる。このぬらりくりとしてとらえどころのない妖怪の話の真意は、イエスの言う家にあがりこむ霊と同じであり、古人は人の中にあがりこむ「霊」の存在を知覚し、このような怪談にして伝えようとした。人間でない精霊、死霊、または生きた呪術師の中にもこれを行うものは存在し、人の脳「家」にあがりこみ、主人として振る舞うのである。このような者は、意識的、意識的でないにせよ、存在する。標的の脳という「家」にあがりこんだそれは、被害者が何らかの対策をしない限り、居座り続ける。そして、標的にされる人間はたいてい「隙」があり、「にぶい」のかもされない。何らかの間違った霊的修行法、薬物乱用などをした人間は、オーラ体に傷、ほころびがあり、「ぬらりひょん」からすると、戸口が開いているように見えるのである。そして、「聖霊」がやってこない限り、「それ」は追い出せない。

呪術師の世界ではひっきりなしにその手の行為が行われており、術師が、なんらかのルートから侵入して、「契約」と称してエネルギーを奪う、なんて霊的違法行為までまかり通っている。それでも「ぬらりひょん」に対して頑健な抵抗を試みる人間もいる。ある、関西在住の魔女から聞いた話だが、その人の弁を借りれば、そういうのは「自分にしちゃえ」とのことである。もしくは、「トロイの木馬」という術式がとられる。標的に「自分の分身」を潜り込ませるのだ、だんだんとラポールを形成していった、「仲良く」なるわけである。かくして、その魔女の「お願い」を聞きやすい体質になった「標的」に、あとあとよく考えれば割にあわない仕事である。「トロイの木馬」を仕込む方法は多々あるが、もっとも効率のよいのはSEXである。やったら、おしまいなのである。

昔、TVに出ていた、ある霊能者も「聞き分けのない霊は、食べる」との名言を残しているが、そのようなことである。もっとも、そのようなことができるのは「鬼」だけなので、ひょっとしたらその霊能者も「鬼子母神」の系統なのかもしれない。もっとも、その霊能者が対象としているのは「死霊」なので、後述する、ヴードゥー教のゾンビ使用のような・・・「生きている人間を使う」呪術行為には含まれない。

ヴードゥー教のゾンビ使用においては、被害の自意識を消去、もしくは封印して、言うことをきかせるわけであるが、呪術師もしくは「悪魔」は、被害者と「神」の契約を切らせるのである。それには、「ありとあらゆる手段」がとられる。「神」との契約が無ければ、その手の違法行為は成立するケースがある。もともと、肉体の使用権、この世で生きる権利は「神」に属するわけで、それを放棄した人間にはこの手の術式が通ずる。それが、どういう人間と言えば「自殺者」「自殺未遂者」である。彼らは、人として生まれ生きることが、どんなに幸運なことか、わかっていない。一度、肉体を離れてしまえば、「沈みがちな霊」は、粉みじんになるうと、刃物で切り刻まれよう、臼で敷かれよう、炎に炙られよう、文句は言えないのである。生きる権利、平等などというものは「法のない、混沌とした」霊の世界では通じない。生きることを放棄した時点で、「生かしてやるから、〇〇しろ」という強力な霊、悪魔との契約が成立する可能性が生まれるのである。

「肉体使わないんだろ？だったら俺らによこせ」

と、「ぬらりひょん」に言われたところで、自殺者は拒否できない。大抵の場合、「ぬらりひょん」は単数ではなく、複数で来るのである。これらは「百鬼夜行」とも言われる。多数性は呪わしい状態であり、それは後述するが、姦淫の原理でもある。

不幸なことに、そして黒魔術師にとっては幸運？なことに、現代では自殺のサイトなどがたくさんあり、自ら命を断つ人間が増えている。その手のサイトでは、言うなりになる「ゾンビ」を手に入れようと、黒魔術師がウロウロしているのである。術者またはそれらの悪魔的エネルギーが被献者に触れたい場合には、ゾンビ候補者に自殺未遂を起こさせ、「神との契約」を破棄させる手段などもある。

その、もっとも有名な呪術形式はハイチのヴードゥーにおける「ゾンビ」であり、本来あの術式は「ゾンビ・パウダー」などによって代表される薬物によって、標的を弱らせ、陥落していく手順も含まれているはずである。直接的、間接的暴力手段によって、標的はしだいに術者の言うことをきく奴隷にされていく・・・薬物、家族を殺すなどの脅しや、催眠術、さんざん否定したあげくの賛美のシャワーなど・・・手口には枚挙のいとまもない。術者は酒場や、ネット上の自殺系サイトをうろついており、「地上で生きる権利」を放棄しそうなものに、甘い言葉で契約を持ちかけるのである。

このような「支配」「非支配」のゲームは裏の世界では常に行われており、呪術師の「自己拡大の欲求」によって行われている。これは、ローマ帝国の領土拡大とまったく変わらない欲求に基づき行われ、「自分にしちゃえ」「食べてしまえ」といった言葉で、呪術を行うものたちの間では表現される。

まよひが（迷い家）

この章では、呪術師の基本的な構えについて書く。読者は、それによって〈呪術師〉の何たるかを知るだろう。〈呪術師〉とは〈盗人〉なのである。我は侵入する〈ぬらりひょん〉の構えである。

迷い家（まよひが）とは、東北、関東地方に伝わる怪談で、柳田國男が「遠野物語」で紹介したことにより広く知られるところになった。「まよひが（まよいが）」とは遠野での呼称である。

典型的な概略としては、山奥深くに迷い込んだ者が偶然立派な門を持った屋敷にたどり着く。屋敷の庭には紅白の花が咲き乱れ、沢山のニワトリ、牛馬があり、座敷には綺麗な食器が多数並べ出されており、火鉢の火はついたままで、囲炉裏には沸いたばかりのお湯がかけてある。しかし、人は誰ひとりおらず、呼びかけても応える者はない。迷い人は暫し休息を取った後、什器をいくつか携えて屋敷を後にした。そしてようやく山を抜けることが出来たが、再びかの迷い家を訪ねようとしても決してたどり着くことは出来なかった。持ち帰った什器で米を計ると、いつまでたっても尽きることはなく、迷い人の家は里に戻ってから大層繁栄し、一躍大金持ちとなったという。

「迷い人がたどり着く」「無人」「椀などの什器を持ち帰る」「訪問者の家が栄える」などの共通点を持ちながら様々なバリエーションが存在する。無欲な人が何も持ち帰らずに迷い家を後にすると、あとから川上からお椀が流れてきたりする。その椀を使って穀類を測る升（ます）とすれば穀倉は尽きる事がなくなるともいう。

意識体が離脱して人の中に入る・・どうも、その現象は古来からあったらしい。それらの現象はこう表現される・・旅人が散歩していると家がある。家に入ると、食事の支度はととのい、風呂にも入れるが、誰もいない。何かを持って帰れたら、繁栄し、大金持ちになる。大金持ちになるは暗喩である。何らかの価値あるものを、呪術師は手に入れることができる。

これら日本各地に伝わっている現象はまよひが（迷い家）と呼ばれた。他人の脳にアクセスできる、そのサイキックな力を持つ者ならば、この現象の意味もわかるだろう。それが、日本の昔話、怪談に表されているというのは驚くべきことである。「家のものを持ち帰ると繁栄する」家のものとは何か？という疑問が、まず頭の中に浮かぶ・・それは「家」となっているものの「記憶」かもしれない、本人の心の一部のことかもしれない。

映画「インセプション」では標的となる人間の「記憶」に潜り込み、「記憶を盗む」、もしくは「記憶を書き換える」プロフェッショナルたちの姿が書かれていたが、そのようなものである。

〈私〉の経験では、得るものと対価として払うものは等価交換である。必ず、苦痛を伴う。自分の荣誉がすべて他の者の荣誉となる苦痛を思えばいい。

マヨヒガが〈私〉を取り込もうとする、何らかのものが私を取り込もうとする、そのものの心の中では命令の嵐が吹き荒れている。〇〇に従え！しかしに、取り込まれている間は、何をやっても、どんなに手柄をたてたとしても、〈私〉を取り込んだものの手柄とされる。〈私〉の名前はいっさい呼ばれないのだ。「マヨヒガ」の主人は「ソロモン王」である。意識の違法侵入者にとって驚くべきことに、多くの「人の心」・・それは「家」と表現されるのだが、その家の主人は「自分のほうが偉い」と必ず思っている。驚くべきことである。それに対し、「狡猾な侵入者たる私」はこう答えるのだ。「おお、王よ私は仕えることを知っている」。

そのうち、自分の手柄だけではなく、自分の生きてきた軌跡、親兄弟、恋人、妻までが「マヨヒガの主」を〈私〉と見做しはじめる。これは、おそろしいことである。

悪魔とは、追放されたものなのだ。追放されし放蕩息子、ヤコブは〈征服せし異教の神、ぬらりひょん〉とセットなのである。

男性の家に〈男の悪魔〉は嫉妬する。女性の家に〈女の悪魔〉は嫉妬する。〈盗人〉はとても純情なのだ。しかし、〈家の主〉に嫉妬していても始まらない。嫉妬しているということは、まだ自分が存在しているという証拠なので、よしとすべきである。このように、おまえのものはおれのものというヨブ記のような、ジャイアニズムの嵐をくぐりぬけ、私は何をすることができるとか？

マヨヒガの主はソロモン王であり、対する霊的なハッカーは”悪魔”ベリアルの構えである。得るものはその苦痛に値するものでなくてはならない。私はそれらのジャイアニズムの嵐をくぐりぬけ、時間性に関する秘密を聞いた。時間が立体として成り立つことを、知って、〈私〉は満足した。

マヨヒガならぬ、とんでもなく荒れた家であった・・。〈私〉はもっと正直で居心地のいい家に住みたい。

取り込まれるときは〈入っている〉と表現するのだが、そんなときはそのもののできる事が、できる。一例をあげるのならば〈ダンス〉のステップやら、〈武道〉のおける身のこなし、〈演劇のメソッド〉なども、〈何となくできるようになっている〉ということである。これは、同時に、〈入り、入られている〉。

普通の人には〈王国〉が正常に稼働しているときは、「入ったものが自分にはない能力を求めて私に入っても・・」と自己優位性に基づく構えである。しかし、〈入るもの〉〈盗人〉は逆に〈王国〉〈他者の脳〉に入るといろいろ自分を損ねる、とほんとうは思っている。自分に無い能力を求め他人に入るのか？それとも教え導くために他人に入るのか？かつて私の脳に入ったものは言った、〈私は仕えるということを知っている〉。

釈尊は仙人に〈仕える〉ことを知っていた。そして、何らかの〈秘伝〉を得た。しかるに、釈尊が〈盗人〉であることに気づいた〈家の主〉・・仙人、提婆達多は岩を落とし、教団の拡大を囁き誘惑し、最後には毒爪で殺そうとするのである。それは、命がけの戦いなのである。

「聖書」においては〈ヤコブ〉が〈ラバン〉に仕えている。

『見よ、私は盗人のように来る、裸にならず、衣服を身につけているものは幸いである。』

ラバンに仕えるとはそういうことだ、ヤコブは14年間も仕え・・娘二人と家畜と神像を手に入れている。ラバンの家はここでは〈マヨヒガ〉なのである。

〈侵入して、食べられて〉感じることは、被侵入者には当初、私が〈周囲の見知った人間〉に写っている・・が、中身は別物である。侵入したエネルギーが〈仲が良ければ〉仲のよい知り合いに。〈仲が悪ければ〉仲の悪い知り合いに。そう写るものである。が、目に映るものだけが真実とは限らない。

〈侵入者〉は浮動票であり、善悪、そして愛の天秤のバランスを保つものでもある。私たちはそこで〈自一他〉を超えた円の中に

いることを知るだろう。

いずれにせよ、＜盗人＞の興味は、どれだけ遊べるかである、危険な遊戯ではあるが。これまでの価値観を大事にしてひといばりするような＜家の主＞は徹底的に遊ばれ、化かされるであろう。

猯（ばく）

ここでは、他人の〈夢〉に入り込んだときに〈注意すべき天敵〉について語る。

<マヨヒガ>即ち・・他人の記憶野を旅していると、無理やり、記憶を食べられたかのように記憶が途切れることがある。思うに、それは覚えてはいけぬ記憶なのだ。大抵、その手の記憶ではあたかも他人にとりこまれているかのような、違和感、そして見覚えの無い感情的乱流がある。すべて、自分に所有権のあるものだが、何者かに取り上げられていくような感覚。しかし、それと同時にまた違う情報もこちらに混入してくる。その情報をメモするチャンスがあったならば幸いだ。その手の記憶は失いやすいからだ。

例えば、さっきあげた、「時間を立方体として見る」その知識では、メモしておいたから幸いであるが、自分の中では五分後には忘れていた。睡眠と覚醒の半ば、うとうととした半覚醒状態において、〈旅〉は行われる。友人の顔をした「何者か」から、その時間性知識を掠め取った私は、夢うつつに「回収いそげ」との声を聞いていた。回収係がいるのである。聞いた話ではあるが、あちら側の世界には「記憶の回収係」のような存在が巡回しており、例えば、死んだ人間の記憶などを回収しているらしい。

この「記憶の回収係」もしくは、その手の記憶が、急に消え失せる現象を指して、古人は「猯」と読んだのではなからうか？「猯」は体が熊、鼻は象、目は犀、尾は牛、脚は虎にそれぞれ似ているとされるが、その昔に神が動物を創造した際に、余った半端者を用いて猯を創造したためと言われている。猯は人の夢を喰って生きると言われている。悪夢を見た後、「この夢を猯にあげます」と唱えるとその悪夢を二度と見ずにすむという。しかし、悪夢と猯が関連づけられるのも、たいてい「自分」が「あちら側」もしくは「他人の意識」に漂っている、もしくは潜り込んでいるときに見る夢は「悪夢」だからである。「あちら側」の意識は、通常の意識に馴染むわけもなく、「他人の意識」は異物を排除しようとして提婆達多のように攻撃を加えるか、支配下に置こうとするからである。そういうときの他者の意識は、ヨブ記の神のようなジャイアニズムが伺われる。しかし、逆に言えば、悪夢を見る時はチャンスであり、自らに重要な情報を得た可能性が高いということである。また、その秘密に近づくごとに、攻撃は激しくなり、〈番犬〉、ケルビムの如きものが出てくるかもしれない。ちなみに、ある閃き、情報がポーンと己の脳に入ってきたとして、それがどこかの〈霊的な結社〉の秘密だった場合、彼らは総攻撃をしかけてくる。というか、霊的にみれば、いつのまにか彼らのアーカイブの中枢に入り込み、情報を失敬したふうに、「記録保持者」たちからすると見えるわけである。それどころか、私は実際に彼らの結界に引っかかり、ひどい目にあつたことまでである。

ミラ・ジョヴォヴィッチ主演の「フォース・カインド」という映画があり、ミラ・ジョヴォヴィッチ扮する「精神科医」から逆行催眠をかけられた患者たちが、一様にフクロウの夢を見るというシーンがある。彼らは大声で叫び、泣き、どんなに恐ろしいことがあつたかを「催眠中」は覚えているのだが、起きたらほとんど覚えていない。ただ、そういえば「フクロウ」がいた・・くらいしか覚えていないのである。当の「精神科医」もミラ取りがミラになるように、寝ていたときの自分の録音テープに「自分のものすごい叫び声」の入っていることに気がついてから、事態は急展開する・・。

ここでいえば「フクロウ」は「あちら側の番人」「ハンター」であり、その邂逅をにおいて、見てはならない情報、その記憶を回収、もしくは封印する者である。それらの「記憶」はおそらく、自分にも他人にも危険なものである。集団意識は「異質な記憶を含んだ意識」を平に慣らそうとする傾向にある。多くは、〈お父さん〉と〈お母さん〉という象徴が用いられる・・。見てはいけぬものを見て、自立されては困るのだ。「あちら側」の者たちも、それを思い出させないように、何らかの方法により・・その記憶を「封印」もしくは「取り上げる」。これら「記憶」の回収、封印係を「猯」と呼ぶ。

「取り上げる」と言ったのは、「その手の記憶」は脳で覚えるわけではなく、「脳の外」で覚えているからである。記憶は人の脳に留まるものではなく、阿頼耶識的な記憶のネットというものがやはりあり、所属するものは、「どこか」に所属しているからだ。それを「根」のようなイメージで見るとすれば、我々は上から伸びてきた「根」の末端であり、そこに接続して初めて思い出せる・・夢見がそのチャンスの時である。そこから切り離されたとき、人々の記憶は途切れ、「忘れている」。万が一、肉体の脳で憶えていたら・・「世界」にとって予定外のバグということだろうか。そして、夢うつつに「ある声」に言われたことであるが、その「体験した記憶」を追いかけてもいけない。我々は・・「待つしかない」のである。

しょうけら

『百怪図巻』『画図百鬼夜行』に解説文のない絵のみで表されている妖怪である。天窓からのぞく鋭い鉤爪の三本指を持つ、獣のような外見の妖怪である。『天窓を開ける』とは古来からキリスト教、や世界中の秘教などで、天と交信する、天の秘力が降りてくるさいの、通路のドアが開く象徴的表現として使われてきた。窓を開いて、天の力を迎え入れるわけである。天窓とはギリシャ正教における『イコン』でもあるのだ。

庚申の行事に「しょうけら」の名がある。庚申とは、人間の体内に三尸という虫がおり、庚申の夜に天へ昇って、天帝にその人の罪を報告し、天帝はそれによりその人の命を奪うとされていることから、庚申の夜は三尸を体外に出さないよう眠らずに過ごす行事である。この行事の日に早く寝た者はしょうけらにより、害をこうむるといい、この害を避けるために

「しょうけらはわたとてまたか我宿へねぬぞたかぞねたかぞねぬば」

と呪文を唱えると良いと伝えられているため、しょうけらとは庚申待において人間に罰をもたらす、妖怪というよりかは天帝、神の使いという側面が強いものであることがわかる。害をこうむるとは、天帝を恐れずに、早く寝るような不信心ものを、しょうけらが罰するということである。ここに『天使』としての”しょうけら”があぶり出しのように浮かび上がってくるわけである。

”しょうけら”はまさに天の使いであり、「獣」のような姿をしているのは、”生命の樹”を守るために配置されたケルビムと同じである。三本の爪を持つとは、あたかもシヴァ神や西洋のデビルが持っている、「三叉槍」と同じ意味であろう。つまり、ここでは罰則を伴う、天の罰が破壊的意味を帯びるときには、「悪魔」に転換されうる。それらをわけずに「しょうけら」というわけのわからぬものにするところに、「天使」と「悪魔」の両面性を併せ持った「妖怪」という約款の本質があるわけである。より古い、原義的な意味を持つときに、天使と悪魔は両面の顔を持つ、本来一つのものとなるのだ。

人形、形代

魔術の基本に『人形に話しかける術』というものがある。これは、実のところ恐ろしいワザに変換可能なのである。そもそも、人形、ぬいぐるみ、石、ペット、家畜、土地、精霊などに"名前をつける"ということは、"自分"(そもそも自分というのがおかしい概念なのだ)、これは私のもの、と長年をかけてラポール、もしくは支配的なテレパシーをかけて、首輪をつけるわけである。名前が首輪である。・・・もしくは、悪質な場合には術者のマーク（紋章）を書いとくわけである。牛に黒いサインペンで大きく名前やシジル（紋章）を書くことで、それは術者の所有物であることを示している。つまるところ、"烙印"である。おお、名前こそは原初の"烙印"である。我々は赤子のときに自らの名前を嫌がりはしなかつただろうか？社会化されていない、娑婆世界から離れた・・・向こう側の、彼岸のものからすれば、名前などは肉体と同じく、自らを封じ込め、1なるものから離れさせるための"枷"なのである。"意識"からすれば、名前をつけられるなんて偉い苦痛なわけである。山が山でなく、川が川でない状態にとどまっていたものからすれば・・・（つかまるのが悪いんじゃない？いやいや・・・）

さらに悪質なものでは、人間を"式"にする・・・つまり、奴隷よりもさらにひどい"ゾンビ"にする術などもある。そういった者の候補には、"自殺志願者"、"自殺未遂者"などがあげられるだろう・・・。

と、ここで恐ろしいことがわかる。名前をつける、烙印を押し付ける所有者もまた、名前を持つものなのである。彼は、自ら名前をつけられてから、意識的にそこから離れるベクトルを知らず、無名なることをよろしく思っていない。"俺"なる概念がいかにか"所有"するか・・・しか考えていないわけである。陰謀論で噂されているフリーメーソンなどは、皆この意識である。僧など、意識的に"我"や"名前"から離れようとする者に対して彼らはこう、いどみかかる。"オマエのものではないなら、私有財産くれよ、と。" ああ、その私有財産には妻や子も含まれるのだろうか？釈迦は自らの継承すべき国家、一族、親、妻、子供を皆、放下してしまったが・・・。

思うに、こうした所有欲、我所執、サンスクリット語でママカーラとも言われるそれは、本来、放下されるべき、捨てられるべきものなのだ。しかし、この"我所執"なるものはなんと伝染する。資本主義は伝染する。さらに小さな基本的なレベルで言うならば、親に過度に所有されていたものが、大人になって無自覚に子供にそのトラウマを押しつけるようなこともあるのだ。

しかし、・・・おもしろいもので、所有したくないもの、例えば「所有されていたトラウマ」もあるわけである。所有されていたトラウマは所有したくない・・・そこで、別のものを所有することにより、トラウマを解消する・・・なんだか、絵の中に絵があるみたいな言いかたになってしまうが。そういうものを、人に無自覚に押し付ける、引っ付ける人もいる。同じようなケースで、**所有したくないもの(呪い、罪、死、やっかいなモノ、別れた恋人、つらい記憶)が追いかけてきた**

場合、いらなわけである。こういうものを押し付ける人形のようなものが『形代』である。

ああ、不良債権を人に押し付けるヤクザのような手口・・・。

こういうモノの扱いは、ペイガンというか、女神信仰の人、魔女に達人が多い・・・思うに女性というものが歴史上、長く、男や家の所有物であった・・・ということ。異端審問など、大規模なジェノサイドがあったのが影響している。つまり、女神には傷、トラウマがあるわけである。そういうものを、逆に魔女たちは『形代』に押し付ける。つまり、信者や、子供や、拾ってきた木や石の精霊や、人形、反抗しない金属などにである・・・私はこういう目にあってきたのよ、という声にならないテレパスを人形などに送るわけだが、ここに奇妙な現象が起こる。女神や魔女の迫害の歴史、トラウマを理解し、同調すると・・・なんだか捕獲された気分になる。地縛霊が自分の非業の死を人に再体験させるようなもので、それに気づいていないと、なんだかわけのわからないものに攻め込まれて所有されている気分になる。おそらく、魔女たちの目には、そのトラウマを体験させた異端審問官やキリスト教の"ネガ"が契約する『悪魔』に写っているのだろう。これは、心理学的な元型であり、暴君の父に怯えた母が、子供にオマエはお父さんのモノなのよ、と連呼するに等しい。この場合、子供は形代なのである。

おそらく、魔術、とりわけ魔女術で重要な"人形の術"はそういう経緯で発達してきたに違いない。(じつはかなり黒いのである、この術は。)よく、観察すれば人形や、そういった意識の・・・自意識の発達まで理解できるかもしれない。自意識、自我はルシファーの発明、と言われているが。人形、奴隷から脱出するためには反逆できるまで自意識を発達させねばならず、発達したらばルシファーの罠である。人形の術からはいろいろ、学べる。

また、これは魔女の母にとっては、都合がいいのかもしれない。"所有、名前をつけてナニカを奴隷化する術式"に・・・じゃあ、"私"のものじゃなきゃあいいのね、と形代を使う。自分の夫なり、祭り上げた教祖さまの"モノ"にすればいいと考えるわけである(黒幕化)。ママは、オマエはパパのものなのよ・・・と、子供にそういうふう働きかけをする。これには利点があり・・・つまり、子供が反抗的で暴力的であった場合である。首輪をつけていた"エネルギー""霊物"の性質が悪くなったり、暴走したときに、そっちのほうに行く訳である。"悪魔喚起で、イエス・キリストの御名において・・・"なんてのも実は同じ論理である。パパの権威にひれ伏せと叫ぶママである。こういうときは、パパが形代になっていると思う。しかし、驚くべきことに、パパとのコミュニケーションがとれると(パパの黒さとズルさ、非情さを理解できるということだが)、こんどはパパがママの情けないエネルギーを子供になすりつけるのである！！(形代連鎖)。

さて、日本の神社におけるじっさいの形代はこういう形状をしており・・・。

 神社によって形が違うらしい！！

